（仮称）予科練 平和記念館だより

町教育委員会生涯学習課☎888－1111（327）

暖かな陽光のもと、新しい一年の始まりを感じる月です。中国には「一年の希望は春が決める。一日の希望は暁が、家族の希望は和合が、人生の希望は勤勉が決める。」ということわざがあるそうですが、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

今月号は、予科練生が使用した教科書をご紹介します。

●予科練の教育

予科練習生の教育の目的は、パイロットに必要な教養や体力を身につけることにありました。彼らがどのような勉強をしていたのか、乙第19期予科練生（昭和17（1942）年12月入隊）の授業内容を例にみてみると、大きく軍事学、普通学、武技体技に分けられます。

軍事学では訓話や手旗、モールス信号、気象学や航空工学など戦艦や飛行機に乗るために必要な知識や技術のほかに、短艇や陸上戦闘などを訓練しました。

普通学では数学・物理・化学などの理系科目に重きがおかれていましたが、国語や漢文、英語（戦時中は英語の使用を制限する動きもありましたが、予科練では英語の授業が61時間あったことも特徴のひとつにあげられます。）、歴史（西洋・東洋・日本史）――など、一般の学校と変わらない授業も行われていました。

武技体技では柔剣道、水泳、体操、相撲などが主なものでしたが、ラグビーやバスケットボールなどの球技も人気があったようです。

●習得は命令

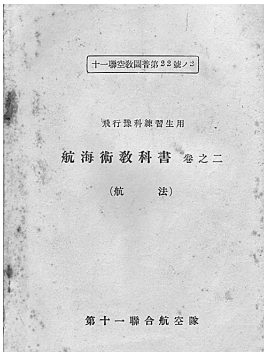
授業で使われた教科書は、A5版で白一色の表紙に黒字で表題が印字されたシンプルなもので、1ページ目には「命令 本書に依り○○を習得すべし」との一文が記されています。

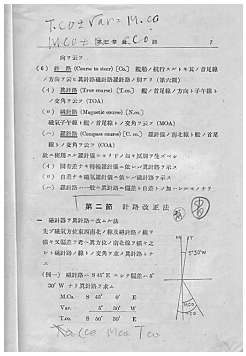
つまり、予科練生は「教科書の内容をすべて覚えることが課せられていた」、と言えます。

試験も常時行われ、常に競争の軍隊生活のなかでは授業も緊張した時間であり、「全精神を集中して一心不乱、一言半句をも聞き漏らさざるの意気込み」（『練習生心得』）であったと思われます。

写真は、土浦海軍航空隊（現自衛隊武器学校一帯）で使用されていた「飛行予科練習生用航海術教科書 巻之二（航法）」です。

レーダーが使用されていなかった当時は、目的地まで飛ぶために天測や計算によって自分の位置を正しく知ることが必要でした。そのため、航法は時間をかけて講義された課目のうちのひとつでした。

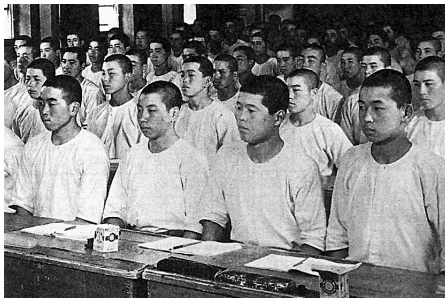




▲教科書表紙　▶教科書内容

書き込みのしてあるこの教科書を開くと、赤とんぼ（練習用飛行機）が飛ぶ空の下、教官の声が響く教室の中で、パイロットを目指し一心に学んだであろう予科練生の姿がしのばれます。

▼予科練の授業風景（土門拳撮影・昭和19年）
『阿見と予科練』（2002年）より



種別	科目数	時間	割合
軍事学	12	586	43％
普通学理系	5	385	28％
普通学文系	5	164	12％
武技体技	5	189	14％
その他	3	48	3％
合計	30	1,372	100％

▲乙第19期予科練生（昭和17（1942）年12月入隊）授業一覧表
『海の若鷲「予科練」の徹底研究』（下平忠彦著・1990年）より